

# 心理学におけるゆるし概念の区別と分類

若 山 和 樹\*

本論は心理学者たちの、ゆるしとその他の概念との区別の仕方と、ゆるし自体の分類の仕方をそれぞれ検討することで、彼らのゆるしの捉え方の特徴を明らかにするものである。ゆるしの性質を探求する上で、それと似た概念とどのように区別するかは重要である。ゆるしの心理学的定義について同意できていないにもかかわらず、心理学者たちは他の概念との区別は明確であると述べている。しかし、実際に赦免、容赦と大目に見ること、忘却、和解の概念とゆるしを比較すると、研究者たちが主張するほどその境界は明確なものではない。心理学者のゆるしの区別は、道徳主義に偏ったものとなってしまうのである。また、研究者たちがどういった視点でゆるしを見ているかということは、そのゆるしの分類の仕方に表現されている。外部の研究者の分類と比べると、代表的なゆるし研究の心理学者の分類は、狭い範囲の分類となっている。心理学者は内面の変化に注目するあまり、ゆるしにおける加害者の変化の側面を軽視してしまっているのである。

キーワード：ゆるし、定義、赦免、容赦、大目に見ること、忘却、和解

## I. はじめに

### 1. 心理学者たちのゆるしの定義をめぐる問題

心理学において、ゆるし (forgiveness) は1980年代半ば以降、現在まで欧米を中心に幅広く研究が進められ、科学的な知見が蓄積されつつある。しかし、その一方で心理学者たちはゆるしの定義について、明確なコンセンサスが取れておらず、(McCullough & Witvliet, 2011)。その状況は本邦においても変わることはない(末等・岡本, 2014)。この定義の合意の困難さは、概念の多様性や多層性に由来する、ゆるしの曖昧さに原因があると思われる。ゆるしは明快に切り取ることができるような、単純な概念ではないのである。

だが、それにもかかわらず、心理学者たちはゆるしと他の概念との区別について、おおむね同意しているとしている (McCullough & Witvliet, 2011; Worthington, Witvliet, Pietrini, & Miller, 2007)。ある概念の特徴を記述しようとしたとき、その概念がそれと似たような他の概念とどのように区別するかは重要なポイントとなる。その概念の実体が曖昧であればあるほど、その区

別は困難となるだろう。ゆるしが単純に定義することが難しい、曖昧さを抱えた概念であるのであれば、近接する概念との境界は不明瞭となるはずである。しかし、ゆるしとその他の概念との区別は既存の分類が自明のものとして心理学者によって扱われており、詳しく振り返られることはない。

また、あまり注目されていない心理学者のゆるしの定義を巡る議論の中に、彼らがいかにゆるしの概念を分類しているかということがある。区別が外部との境界を作るものとすれば、分類とは内部での境界を作るものである。分類をすることによって、研究者たちはゆるし概念の持つ曖昧さを損なわないまま、自らの研究の対象となる部分を切り出そうとしている。その分類の仕方には、心理学者たちがどういった視点でゆるしを見ているかについて、表現されているといえる。何人もの心理学者がゆるしをいくつかに分類することでその理解を試みている。しかし、その分類の特徴や傾向について、現在まで整理した報告は存在していない。

\* 愛知学院大学心身科学部心理学科

(連絡先) 〒470-0195 愛知県日進市岩崎町阿良池12 E-mail: wakayama@dpc.agu.ac.jp

## 2. 本論の目的と方法

そこで本論では、心理学者たちのゆるしの概念の区別と分類、その両者を検討することで、心理学者のゆるしの捉え方の特徴を明らかにする。そのため、まずはゆるしとその他の概念との区別の仕方について、多くの心理学者が依拠する議論を取り上げる。その後、赦免、容赦と大目にみること、忘却、和解の概念とゆるしとの関係性について検討する。次に、ゆるし概念の分類の仕方について、まずは心理学者以外の議論を参照する。それを手がかりとし、代表的なゆるしの心理学者たちの分類の特徴について考察することとする。

## II. ゆるしと近接概念との区別

### 1. Enright によるゆるし概念の区別

心理学者のほとんどが現在、依拠していると考えられるのが、D. Enright による近接概念との区別の仕方である (McCullough & Witvliet, 2011; Worthington, et al., 2007)。Enright はゆるしの科学的研究のパイオニアとして知られる心理学者である。

Enright の区別を検討する上で重要となるのは、彼がゆるしとは道徳的恩恵に基づいてなされるものだと考えていることである (Enright & Fitzgibbons, 2000)。Enright は、ゆるしは憐れみ、慈悲、愛といったものに基づいてなされる道徳的な行為であると考えていた。この背景には、キリスト教的価値観があることが指摘されている (若山, 2015)。この Enright のゆるしの道徳主義の見方は、以下に示すように彼のゆるしと他の概念との区別の仕方に大きな影響を与えている。

### 2. ゆるしと赦免

Enright はまず、「赦免 (pardoning)」とゆるしを区別する (Enright & Coyle, 1998)。ゆるしも赦免も、相手を罰することを止める、という点では一致する。しかし、赦免とは司法に関わるものであり、個人によって示されるゆるしとは異なるものなのであると、Enright は説明する。赦免とはあくまで司法的罰を免れさせるものである。ゆるしはそれとは異なる次元で、被害者から加害者へと贈られるものであり、司法的罰と両立して与えることができる。すなわち、被害者はその個人の意思で司法的正義を超え、道徳的恩恵としてゆるしを示すことができるのである。

しかしながら、キリスト教ではない伝統に目を向け

ると、ゆるしは司法的領域の事柄として語られてきた。ギリシアにおいてはゆるしと赦免は同一の言葉で表されるようなものであった (Konstan, 2012)。また、ユダヤ教におけるゆるしの概念も、赦免の語感に近いものであると述べられている (Rye, Pargament, Ali, Beck, Dorff, Hallisey, Narayanan, & Williams, 2000)。司法における罪の判断のプロセスと、個人の内心のゆるしを切り離して捉える見方は、決して一貫して受け入れられているわけではない。加害者の責任の評価がゆるしの生起に大きく関わるというモデルもあり (Ohbuchi & Takada, 2001)、むしろ両者が共通の心理的プロセスとして描写される可能性も十分にあるといえる。

赦免をゆるしと全く異なるものとして扱うよりも、心理学者はこの両者の関係について積極的に考察していく必要があるだろう。この両者は、ゆるしとは司法的正義の原則では無く、道徳的恩恵によってなされるものであるという前提から区別されている。しかし、それは決して普遍的な見方ではない。心理学者が無批判に赦免とゆるしが異なるものであると前提するのであれば、それは道徳的恩恵としてゆるしを捉える見方に傾いてしまっている可能性がある。

### 3. ゆるしと容赦、大目にみること

次に、Enright は「容赦 (excusing)」や「大目にみる (condoning)」ことと、ゆるしを区別している (Enright & Coyle, 1998)。容赦や大目に見ることも、ゆるすことも、何らかの侵害行為によって生じた加害者への否定的反応が、のちに減少するという点では同じである。しかし、その減少の理由が異なるのである。容赦や大目にみることとは、加害者の責任の再評価によってなされるものである。たとえば、相手にもやむにやまれぬ事情があったからと相手への怒りや憤りを収めることは、ゆるしではなく、容赦や大目にみることであるとされる。一方、ゆるしはそうした合理的理由ではなく、憐れみ、慈悲、愛といった道徳的理由によってなされるものである。Enright によれば、容赦や大目にみるということは、相手を無罪だと判断しているのであり、罪があるにもかかわらず行なわれるゆるしとは、異なるものであると説明するのである。

しかし、たとえ相手にどんな事情があったとしても、誰かを傷つけてしまったとき、完全に無罪になるということはあり得ない。J. Neu (2002) はこの点を指摘し、全て免責されるような状況においても、なおも行為そのものへの同義的責任が問われることとなり、ゆるしの余地は残るであろうと述べている。Enright の

定義に則ったような容赦や大目にみること、全くもしくはごく稀にしか生じ得ないものである。

また、道徳的理由によってのみ相手をゆるすことは、現実においてどこまで可能なのか、Enrightの主張を突き詰めるのであれば、純粋なゆるしとは、一切の免責の余地がない事態においてのみ存在しうることになる。しかし、そうした「不可能の可能性」として生じるようなゆるしとは、理解不能なものとしてしか生じ得ないものなのである（デリダ、2001）。

結局のところ、心理学者たちが実際に扱っているゆるしとは、容赦や大目に見ることと、はっきりと区別ができないようなものであると考えられる。道徳的理由からなされるゆるしを強調するあまり、それ以外の理由からなされたものをゆるしとは異なるものとして扱うことは、実体に則さない議論に陥ってしまう可能性があるだろう。

#### 4. ゆるしと忘却

他にも、Enrightは「忘却 (forgetting)」とゆるしを区別している（Enright & Coyle, 1998）。ゆるしは能動的なプロセスであり、受動的に「忘れていく」とことは異なるものであるとされる。

ゆるしと忘却の区別は、先にあげた概念に比べればはっきりとしているだろう。それにもかかわらず、両者には重なる部分がある。まず、ゆるしも忘却も、それが生じることによって、個体の否定的反応が減少することが共通している。ゆるしは道徳的恩恵であると考え、Enrightにとっては、それは単なる否定的反応の減少ではなく、慈悲や共感といった肯定的反応の増加が必須となる（Enright & Fitzgibbons, 2000）。しかし、そうした肯定的な要素の発生をゆるしの定義の中に含めていない心理学者もいる（Thompson & Snyder, 2003; 加藤・谷口, 2009）。後者の立場をとる心理学者の場合、ゆるしによって否定的反応が取り除かれたのか、忘却によってそれが生じたのか、見分ける必要があるだろう。

さらに、ゆるしも忘却も、共に時間が経過することがその本質的部分に関わっている。忘却は一般的に時間経過によって生じるが、ゆるすこともある程度の時間経過が必要であることは指摘されている（McCulloch, Fichman & Tsung, 2003）。

また、忘却だけでなく、ゆるしの中にも受動的な性格はあるかもしれない。ゆるしの体験記において、しばしば自分の中に既にゆるしが存在していることに気づく、という描写がみられる（Morimoto, 2009）。Enright

はゆるしの能動的な性格を強調し、相手を積極的にゆるすことを推奨しているが（Enright & Fitzgibbons, 2000）、別の見方においてはゆるしの中にある受動的な性格を発見できるかもしれない。

Enrightのように、道徳的恩恵に基づいて能動的に行なうものとしてゆるしを捉えるのであれば、ゆるしと忘却の区別は明確である。しかし、ゆるしの心理的プロセスを精査するのであれば、そのある部分は被害を忘れていくプロセスと重なるものとして説明できる可能性がある。ゆるしと忘却の関係は、それぞれの心理的プロセスを明らかにしていく上で、さらに解き明かさなくてはならないものであろう。

#### 5. ゆるしと和解

そして、Enrightは「和解 (reconciliation)」とゆるしを、密接に関係があるものであると認めながらも、両者を区別する（Enright & Coyle, 1998）。ゆるしは被害者のみで生じさせることができるものであるが、和解は侵害者と被害者の双方の歩み寄りがなくては生じさせることができないものである。

しかし、ゆるしにおいても被害者と侵害者の双方の変化の重要性を強調する立場もあり（McNulty, 2011）、必ずしもゆるしは一方向的な動きのみで説明されないことが指摘されている。また、ゆるしを他者との関係性における愛と信頼の回復と捉える立場では、よりゆるしと和解は近いものとして描写されている（Hargrave & Sells, 1997）。また主観的にも、ゆるしと和解は極めて近いものとして経験していることが指摘されている（Williamson & Gonzales, 2007）。

ゆるしと和解の区別については、心理学者の間で議論がなされている部分である。Enrightはゆるしとは道徳的恩恵として被害者から加害者に一方的に与えるものであると考えていたため、この両者を区別するのである。しかし、実際の心理的プロセスを考えたとき、その関係は極めて近いものである可能性はある。ゆるしと和解は別個のものであると強調するよりも、その連続性を見ていく必要があると考えられる。

#### 6. 心理学者のゆるし概念の区別の特徴

ゆるしとその近接概念の境界は、心理学者が共通して前提とできるような明確なものではなく、曖昧なものである。だが、心理学者たちはその曖昧さを切り捨て、ゆるしとその他の概念を区別してしまっている。そしてその区別の仕方は、Enrightのゆるしの道徳主義的視点からなされているのである。

つまり、心理学者たちは個々の心理的プロセスの検討からではなく、キリスト教的価値観を背景とする、Enrightの道徳的立場から、ゆるしを他の概念と区別しているのである。こうした心理学者のゆるしの区別は「道徳主義の誤謬 (moralistic fallacy)」とも取られかねないものである。心理学者たちのゆるしの区別の特徴は、ゆるしにおける心理学者の道徳主義への偏りを示すものである。

### III. ゆるし概念の分類

#### 1. 心理学者以外によるゆるしの分類

心理学者たちがゆるしをどのような観点から分類し、そこにはどんな特徴があるのか。それを考察する視点として、まずは心理学者以外の二人のゆるし研究者の分類について取り上げる。

哲学者である C. Griswold (2007) は、ゆるしの行為が道徳的に最も適切な形はどのようなものかについて論じる中で、ゆるしをいくつかの類型に分けている。彼は加害者の変化に対して被害者が応答するという、双方向的なゆるしがもっとも適切であると主張している。そうしたゆるしは「条件的なゆるし (conditional forgiveness)」と呼ばれる。これは被害者のみならず、加害者側の変化があったことを条件として生じるようなゆるしである。それに対して、被害者のみが増えることで生じるゆるしを、一方向的なゆるし、ないしは「無条件的なゆるし (unconditional forgiveness)」と呼ぶ。これは、加害者の変化が無かったり、亡くなってしまったりしても、引き起こすことができるゆるしである。その他のゆるしの形式として、「第三者のゆるし (third-party forgiveness)」がある。人間は自分が直接被害に遭わずとも、他者が被害を被ったことを見聞きすることで、否定的反応が生じることとなる。それを解消するようなゆるしが、第三者のゆるしである。最後に、自分自身を対象として生じる「自分自身へのゆるし (self-forgiveness)」というものが挙げられている。いずれにせよ他者ではなく自分自身を対象とするようなゆるしが、これにあたる。

これらのゆるしは明確に分類できるものでなく、スペクトラムとしてそれぞれの延長線上にあるものである、とされる。Griswoldの哲学的議論に立ち入らなくても、彼の「条件的なゆるし」「無条件的ゆるし」「第三者のゆるし」「自分自身へのゆるし」は、ゆるしの概念を網羅的にカバーしており、他の研究者の分類を考える上で有用であると思われる。

Griswoldと同じく、双方向的なゆるしの重要性を説いている宗教学者の M. Mayo (2015) は、聖書のテキストとキリスト教的実践としてのゆるしとの間の緊張関係について論じる中で、ゆるしをその機能からいくつかの類型に分け、さらには心理学者への批判を行なっている。Mayoはゆるしを「否定的感情のコントロールとしてのゆるし (forgiveness as controlling negative emotions)」「治療的なゆるし (therapeutic forgiveness)」「コミュニティを強化するゆるし (forgiveness as strengthening community)」の三つに分類する。「否定的感情のコントロールとしてのゆるし」とは、その名の通り、怒りや憤りといった否定的感情をコントロールするものとして、ゆるしを捉える見方である。さらに心理的健康のために否定的感情を手放すようになると、そのゆるしは「治療的ゆるし」と呼ばれるものとなるのである。この両者の形式のゆるしにおいては、Griswoldの述べる「無条件のゆるし」の性格が強調されている。この両者と異なる性格を持つのが、「コミュニティを強化するゆるし」である。人間同士が傷つけあった後、その関係が修復されることがなければ、やがて人間同士で形成されるコミュニティそのものが解体されてしまう。そこで関係性を修復し、コミュニティを維持しそれを強化するためには必須となるようなゆるしが、この形式のゆるしであるという。こうしたコミュニティを強化するゆるしが生じるためには、被害者だけではなく、加害者の変化も必要とされる。つまり、加害者から悔恨が表明され、その交換として被害者からゆるしが与えられることで、壊れたコミュニティが再生するのである。つまり、被害者の内心の変化よりも、両者の関係性の変化こそが重要となる。すなわち、この形式のゆるしでは、Griswoldの「条件的なゆるし」の性格が強調されているといえる。

Mayoはこの分類を行なう中で、心理学者たちが果たした役割について言及している。近代から現代にかけて、否定的感情のコントロールは、被害者の内心の変化のみによって生じさせることができると考えられるようになっていった。心理学者や心理療法家はそれを利用し、否定的感情を抑えることが被害者のためになると主張することで、それを治療的ゆるしへと発展させたのである。心理学者は「無条件のゆるし」を強調するあまり、ゆるしにおける加害者側の変化について見逃してしまったと、批判されているのである。

#### 2. 心理学者の定義からみたゆるしの分類

それでは、実際に心理学者たちは、どのようにゆる

しを見ているのであろうか。心理学者のゆるしの分類の仕方から、それを検討していくこととする。

まず、McCulloughとWitvliet(2011)は、心理学者たちの定義からゆるしを分類している。それによると、心理学者はゆるしを「反応(response)」「パーソナリティ傾向(personality disposition)」「社会的ユニットの性格(characteristic of social units)」の三つの観点から定義しているという。反応としてのゆるしは、加害者への否定的反応の減少と肯定的反応の増加が中核となるものである。パーソナリティ傾向とは、いわゆる「ゆるしやすさ」として、さまざまな対人関係場面で生じる他者をゆるす傾向性である。この二つに関しては、被害者側の変化について扱うものであり、無条件のゆるしとしての性格が強いものであろう。

しかし、McCulloughとWitvlietは「社会的ユニットの性格」として、ゆるしは親密さ、信頼、コミットメントと同様に、コミュニティを結びつけるものであると述べている。これはMayoの「コミュニティを強化するゆるし」と似た分類であり、心理学者たちも加害者側の変化を含んだ、条件的なゆるしの性格を扱っているように見える。

だが、この論文では反応としてのゆるしやパーソナリティ傾向では具体的な研究が引用されているものの、社会的ユニットの性格としてゆるしを定義しているとして、引用されている研究はみられない。つまり、心理学者たちはゆるしにおいて生じる加害者側の変化について認識はしつつも、内面の変化に比べると、ほとんど注目していないことが示唆されているといえる。

### 3. 代表的な心理学者によるゆるしの分類

それでは、心理学者はどのようにゆるしを実際に分類しているのだろうか。ここでは、代表的な二人の心理学者によるゆるしの分類の仕方について取り上げる。

Handbook of Forgivenessの編者であるE. Worthingtonは、被害者の変化を認知的なもの、感情的なものに分けることで、ゆるしを分類している(Worthington, 2003)。それが「決断的ゆるし(decisional forgiveness)」と「感情的ゆるし(emotional forgiveness)」である。「決断的ゆるし」とは、自らの行動をコントロールし、加害が生じる前の関係に戻ろうとするようなゆるしであり、いわば認知的に相手をゆるすことである。それに対して、「感情的ゆるし」とは、加害によって生じた否定的感情が肯定的感情に置き換わることを指すもの

である。Worthingtonは、決断的ゆるしは行動を変化させるものであるが、その人を「癒す」ものではないと述べる。そして、感情的ゆるしこそ癒しを導くゆるしの本体であると述べているのである。

そして、ゆるし研究のパイオニアであるEnrightは、ゆるしの区別でも言及したような彼の道徳的見方を前面に出した分類を行なっている。彼は、ゆるしを「本当のゆるし」と「偽りのゆるし(pseudo forgiveness)」とに分類する(Enright, 2001)。先にも述べたように、彼にとってゆるしとは、道徳的恩恵に基づき、被害者の意思によってのみ生じさせられるものである。そうしたゆるしこそ本物なのであり、それ以外のものは相手をコントロールするためになされるような「偽りのゆるし」としてであると述べているのである。

Worthingtonによる分類も、Enrightによる分類も、被害者の変化のみに注目し、それを分割したものである。言うならば、無条件のゆるしをより詳細に記述しているが、条件的なゆるしの視点は完全に抜け落ちてしまっているのである。この二人は両者とも、ゆるしの治療的力に注目し、その臨床的活用を目指した心理学者であった。彼らの分類は、被害者側の変化をより細かく捉え、その働きについて細かく分析し、それを臨床的に生かすことを可能としてきた(Enright & Fitzgibbons, 2000; Worthington et al., 2007; Wade, Hoyt, Kidwell & Worthington, 2014)。しかしその一方で、ゆるしによって生じる、加害者側の変化を捉えて記述することはできないものとなってしまっているのである。

### 4. 心理学におけるゆるし概念の分類の特徴

GriswoldやMayoの分類が、被害者と加害者の双方の変化を捉えることが可能であるのに対して、WorthingtonやEnrightの分類は、被害者の変化に関してはより詳細な描写が可能ではあるものの、加害者側の変化は捉えることができないものである。外部の研究者の分類と比べると、代表的なゆるし研究の心理学者の分類は、狭い範囲の分類となってしまっているといえるだろう。

しかし、心理学者は決して被害者と加害者の双方の変化を捉えるような見方ができないわけではない。被害者の変化と加害者の変化、その両方を捉えて記述することができる分類が、社会心理学者らから提出されており(Baumeister, Exline, & Kristin, 1998)、彼らの分類は、加害者側の悔恨(repentance)の役割など(Exline & Baumeister, 2000)、ゆるしを被害者の内面の問題か

ら、外に広げることが可能にするものである。しかし現在、心理学におけるゆるし研究の多くは加害者や環境の要因ではなく、被害者側の要因を探求するものとなっている(高田, 2015)。このことは、ゆるしの研究を牽引してきた心理学者の多くが、社会心理学者ではなくゆるしの治療的応用を目指した心理学者であったことと(若山, 2015)、無関係ではないだろう。代表的なゆるしの心理学者の分類の特徴から明らかになるのは、心理学者は内面の変化に注目するあまり、ゆるしにおける加害者の変化の側面を軽視してしまっているということである。

#### IV. おわりに

以上、心理学者たちのゆるしの概念の外部との区別と、内部における分類の仕方を検討した。ゆるしとその他の概念の境界は曖昧であるにも関わらず、心理学者たちは道徳主義に基づいた仕方で区別をしている。また、心理学者のゆるしの分類は、他の研究者と比べて狭い範囲に集中しており、被害者の変化の側面を強調しすぎている。これらが示すのは、現在の心理学者のゆるしの捉え方が、道徳主義と個人の内面へ偏ってしまっているということである。

これらの結果は、今後のゆるしの研究の方向性について示唆を含むものである。まず、ゆるしの道徳主義の見方から脱却し、概念の構造やプロセスを明らかにしようとするのであれば、現在のようなやり方でゆるしを他の概念と区別し続けることは建設的ではないだろう。むしろ、積極的にゆるしとそれらの概念の重なり合いや関係性について解き明かしていくことで、新しい知見を得ることが期待される。また、心理学者は加害者の変化のみならず、より広い範囲を視野に入れていく必要がある。Griswoldの分類に則れば、心理学者たちは自己へのゆるしについては捉えているが(Hall & Fincham, 2005)、第三者のゆるしについてはほとんど言及していない。そうしたゆるしの多様な側面を捉え、一般的性質を解き明かすような研究が、今後求められると考えられる。

#### 文 献

- Baumeister, R. F., Exline, J. J., & Sommer, K. L. (1998). The Victim Role, Grudge Theory, and Two Dimensions of Forgiveness. In E. L. Worthington, Jr. (Ed.), *Dimensions of Forgiveness: Psychological Research & Theological Forgiveness*. Philadelphia: Templeton Foundation Press, pp. 79-104.
- デリダ, J. 林好雄, 森本和夫, 本間邦雄 (訳) (2001). 正義と赦し 言葉にのって (pp. 183-211). 筑摩書房
- Enright, R. D. (2001). *Forgiveness is a Choice: A Step-by-Step Process for Resolving Anger and Restoring Hope*. Worthington, DC: American Psychological Association.
- Enright, R. D., & Coyle, C. T. (1998). Researching the process model of forgiveness within psychology intervention. In E. L. Worthington, Jr. (Ed.), *Dimensions of Forgiveness: Psychological Research & Theological Forgiveness*. Philadelphia: Templeton Foundation Press, pp. 139-161.
- Enright, R. D., & Fitzgibbons, R. P. (2000). *Helping Clients Forgive: An Empirical Guide for Resolving Anger and Restoring Hope*. Worthington, DC: American Psychological Association.
- Exline, J. J., & Baumeister, R. F. (2001). Expressing forgiveness and repentance: Benefits and barriers. In M. E. McCullough, K. I. Pargament, & C. E. Thoresen (Eds.), *Forgiveness: Theory, research, and practice*. New York: Guilford, pp. 133-155.
- Griswold, C. L. (2007). *Forgiveness: A Philosophical Exploration*. New York: Cambridge University Press.
- 加藤司・谷口弘一 (2009). 許し尺度作成の試み 教育心理学研究 57 158-167.
- Hall, J. H. & Fincham, F. D. (2005). Self-Forgiveness: The Stepchild of Forgiveness Research. *Journal of Social and Clinical Psychology*, 24(5), 621-637.
- Hargrave, T. D., & Sells, J. N. (1997). The development of a forgiveness scale. *Journal of Marital and Family Therapy*, 23(1), 41-53.
- Konstan, D. (2012). *Before Forgiveness: The Origins of a Moral Idea*. New York: Cambridge University Press.
- Mayo, M. (2015). *The Limit of Forgiveness: Case Studies in the Distortion of a Biblical Ideal*. Minneapolis: Fortress Press.
- McCullough, M. E., Fincham, F. D., & Tsang, J. A. (2003). Forgiveness, Forbearance, and Time: The Temporal Unfolding of Transgression-Related Interpersonal Motivations. *Journal of Personality and Social Psychology*, 84(3), 540-557.
- McCullough, M. E., & Witvliet, C. v. O. (2011). The Psychology of Forgiveness. In S. Lopez, C. Snyder (Ed.), *The Oxford Handbook of Positive Psychology*. 2nd ed. New York: Oxford University Press, pp. 446-458.
- McNulty, J. K. (2011). The Dark Side of Forgiveness: The Tendency to Forgive Predicts Continued Psychological and Physical Aggression in Marriage. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 37(6), 770-783.
- Morimoto, A. (2009). Forgiving Is Fore-giving: Reaching out for Peace in Interpersonal Relations. *The Japanese Journal of American Studies*, 20, 193-210.
- Neu, J. (2002). To Understand All is to Forgive All-Or Is It? In S. Lamb & J. G. Murphy (Ed.), *Before Forgiving:*

- Cautionary Views of Forgiveness in Psychotherapy*. New York: Oxford University Press, pp. 17–39.
- Ohbuchi, K., & Takada, N. (2001). Escalation of conflict and forgiveness: A social psychological model of forgiveness. *Tohoku Psychologica Folia*, **60**, 61–71.
- Rye, M. S., Pargament, K. I., Ali, M. A., Beck, G. L., Dorff, E. N., Hallisey, C., Narayanan, V., & Williams, J. G. (2000). Religious perspectives on forgiveness. In M. E. McCullough, K. I. Pargament, & C. E. Thoresen (Ed.), *Forgiveness: Theory, Research, and Practice*. New York: The Guilford Press, pp. 17–40.
- 末藤尚代・岡本裕子 (2014). 大学生の特性としての許しと公正感の関連：道徳性の発達の観点から 広島大学大学院心理臨床研究センター紀要 **13** 51–64.
- 高田菜美 (2014). ゆるし研究の概論 関西学院大学大学院心理学叢誌 **12** 23–31.
- Thompson, L. Y., Snyder, C. R. (2003). Measuring forgiveness. In Shane J. Lopez & C. R. Snyder (Eds.), *Positive psychological assessment: A handbook of models and measures*. Washington, DC, US: American Psychological Association, pp. 301–312.
- Wade, N. G., Hoyt, W. T., Kidwell, J. E. M., & Worthington, E. L., Jr. (2014). Efficacy of Psychotherapeutic Interventions to Promote Forgiveness: A Meta-Analysis. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, **82**-1, 154–170.
- 若山和樹 (2015). 欧米におけるゆるし研究の心理学史 愛知学院大学心身科学部紀要 **11**, 79–88.
- Williamson, I., & Gonzales, M. H. (2007). The Subjective Experience of Forgiveness: Positive Construals of the Forgiveness Experience. *Journal of Social and Clinical Psychology*, **26**, 407–446.
- Worthington, E. L., Jr. (2003). *Forgiving and Reconciling: Bridges to Wholeness and Hope*. Madison: Inter Varsity Press.
- Worthington, E. L., Jr., Witvliet, C. V. O., Pietrini, P., & Miller, A. J. (2007). Forgiveness, Health, and Well-being: A Review of Evidence for Emotional Versus Decisional Forgiveness, Dispositional Forgiveness and Reduced Unforgiveness. *Journal of Behavioral Medicine*, **30**, 291–302.

最終版平成28年10月10日受理

## The Distinction and Classification of the Forgiveness on Psychology

Kazuki WAKAYAMA

### Abstract

This paper describes the features of psychologists who study forgiveness by considering their way of distinction and classification of forgiveness.

In order to explore the nature of forgiveness, it is important to distinguish between that and similar concepts. Although there is no agreement on the psychological definition of forgiveness, psychologists state that the distinction from other ideas is clear. However, when actually comparing ideas of pardoning, excusing and condoning, forgetting and reconciliation with forgiveness, the boundaries are not as clear as the psychologists claim. The psychologists' distinction of forgiveness is biased toward moralism.

The way of classifying forgiveness shows the perspective of researchers who study forgiveness. Compared to the analysis of outside researchers, the classification by psychologists of representative forgiveness research, has a narrow range. Psychologists focus too much on the victim's changes, and neglect the aspect of the perpetrator's changes.

Keywords: forgiveness, definition, pardoning, excusing, condoning, forgetting, reconciliation